

となる。

そういった動きからも、安平村長は、酪農の発展や遠浅付近の開発を目的に、滝川の酪農団体に積極的な入植の招致を行った。



昭和に入り

安平村の酪農が動き出す

昭和4、5年。安平村にとって、大きな動きがある年となった。

まず昭和4年。この年に、滝川酪農団体が視察に安平村（遠浅）を訪れた。そして、約30戸が遠浅の地で酪農をすることを決め、入植することとなった。

開墾の鍬が打ち込まれたのは、昭和

5年4月ごろから。そしてこの動きが、「遠浅酪農」と言われるものの始まりである。

どんな農業が展開されていたのか

火山灰地ではあるものの栽培する農作物に適した肥料を与えることで、生育も良好で生産量も期待できるといふ試験結果が火山灰地試験地より出された。

肥料の与え方さえ間違わなければ、農作物も上手に育つことがわかった酪農家たちは、「①飼料を自前で生産、②飼料を乳牛に与え搾乳、③家畜の糞尿を畑に戻して地力を保持」といった循環するような営農を行い始めた。



牧草ロール・ほっかん麦稈ロール

畑や丘に転がっているコロコロとしたもの。北海道を代表とする牧歌的な風景のひとつと言っても過言ではないでしょうか？

このロールは見た目は同じですが、牧草ロールは「牛などの飼料に」、麦稈ロールは「寝床に敷く」という役割があるのです。

どう見分けるか？

例外もあるでしょうが、ビニールに巻かれているものが「牧草ロール」で、そのまま転がっているのが「麦稈ロール」という簡単な見分け方も♪

